

教員が親しみを込めて、生徒に「おまえ」とか「あいつ」と言うことがあります。ですが、そう呼ばれた生徒は教員に対してどう感じるのでしょうか？

そんな言葉に違和感を感じた他の教員からの意見があり、生徒にかける言葉について教職員で話し合いました。友達言葉で生徒と話すことで距離が近くなることもありますが、指導者の立場で話さなければならないとき、内容に限界が生じたり、しっかり聞いてもらえないこともあるとの意見も出ました。

子どもたちの活動も行っているYMCAは、「くんちゃん運動」を実践してきました。子どもたちには呼び捨てではなく「くん」「ちゃん」をつけて呼びます。高校現場において、多様な生徒もいる今の時代では、私は「さん」を使うことがふさわしいように思います。

15年ほど前、ある教員が生徒を「さん」づけで呼んだところ、生徒たちは、最初はとまどったり、照れたりしていました。けれども、自分たちが大事にされていると感じ、やがてその教員に対する態度も丁寧な言動に変わっていききました。人を大切に思う言葉を使うことは、自身の心を変え、相手との関係性も変えます。

私の娘が高校生の時、最悪の親子関係でした。悩んでいたある日、娘にかける言葉と生徒へのそれとあまりに違う自分に気がつきました。生徒の良い面はいくらでも見つけて言えるのに、娘にはそうでなく「早く起きなさい！」「門限を守りなさい！」と、母親の「役割」の言葉でしか接していませんでした。そこで、生徒にするように“心を込めた”言葉をかけようとした時、そのような言葉が出てこない自分に愕然としました。私の精一杯の言葉は「その服、変わってるね」でした。娘は私のその言葉に驚き、それでも「うん、これ古着屋で買った」と反発でない言葉を返し、その日から親子の会話が少しずつ出来るようになり、心が通うようになっていきました。

言葉は心です。私たちは意識して、丁寧な言葉で生徒たちに接し、大切に思っていることを伝え、関係を深めていきたいと思います。

聖句：初めに言（ことば）があった。言（ことば）は神と共にあった。言（ことば）は

神であった。（ヨハネによる福音書 1 章 1 節）